秋の対話

岸田國士

桔梗
芒
女郎花
こうろぎ
風
蛇
少女
老婆

高原――別荘の前庭――秋
遠景は、澄み渡つた空に、濃淡色とりどり

の山の姿。
舞台中央に白樺の幹が二本並んでゐる。そ
の根もとに雑草の茂み。

第一場

朝――小鳥の啼き声が聞える。桔梗と女郎花と芒とが、それぞれ異なつたポーズをもつて白樺の根もとに寄り添つてゐる。桔梗は十八九、女郎花は十六七、芒は二十一二の少女――何れも、その花の感じに応はしい服装。

桔梗　でも、どうしてお嬢さんだけ残つてらつしやるんでせう。婆やさんと二人つきりぢや、随分淋し

いわね。

芒　婆やさんが、三人分ぐらゐしやべるからかまはないんでせう。

女郎花　あら、だつて、昨夜から今朝にかけて、婆やさんの声は聞えないぢやないの。

芒　それや、お嬢さんは、まだ起きていらつしやらないし、話す相手がないからなんだわ。

桔梗　お嬢さんは、今日に限つてどうしたんでせう。こんなに遅くまで……。きつと、泣いてるのよ。

女郎花　どうして……。泣くわけはないぢやないの。もつと此処にゐたいつていひ出したのは御自分なん

ですもの……。旦那さんや奥さんが、どんなにおつしやつても、東京に帰るのはいやだつていひ張つたのよ。そのわけは、わかつてるでせう。

芒　」
「（同時に）どういふわけなの……。
桔梗」

女郎花　あら、あなたたち、知らないの、それはね、かうなの――あたし、それ、こうろぎさんに聞いたのよ……。

芒　何時……。

女郎花　一昨日の晩。あなたたちが眠つてしまつて

から……。かうなんですつて――（かういひながら、芒と桔梗の耳元に口を寄せ小声で何かいふ）

芒　まあ……。

桔梗　ほんと、それは……。

女郎花　さうなんですつて……。

芒　だつて、もう、他の別荘はみんな閉まつちまつたわよ。ここ一軒だけよ。夜、灯がついてるのは……。

女郎花　うそですよ、あの白煉瓦の家は、まだ引き揚げませんよ。

桔梗　あそこに、若い男の人つて誰がゐて……。あ

の変な、髯をぼうぼう生やした詩人だけぢやないの。

女郎花　ね、それが怪しいのよ。

芒　まさか……。お嬢さんが、あの詩人と……。あら、をかしい。（笑ひこける）

女郎花　ぢや、今夜、起きて聞いて御覧なさい。あの北の窓口よ……。きつと、あそこで、二人の話声がきこえるから……。

桔梗　それが、あの詩人だつていふことがどうして判る？

女郎花　それや、あんた、話のしぶりでわかるわ。――お嬢さんがかういふんですつて――あなたはど

うしてさう、黙つて考へてばかりゐるのつて……。
それからあなたは手をどこへしまつてるのつて……。
そら、あの詩人を御覧なさいよ。何時でも歩く時懐手をしてゐるぢやないの。

芒　さうね。

桔梗　ぢや、やつぱり、さうか知ら……ずゐぶんお嬢さんも物好きね。

女郎花　あたし、なんだか、くしやくしやするわ。あの詩人の奴がいけないのよ。この庭に降りて来る人で、あたしたちに話をしかけてくれるのは、あのお嬢さんだけぢやないの。あんな優しいお嬢さんを、

一体どうしようつていふの……。（泣声になる）

芒　泣かなくつたつていいわ、あたしたちの知つたことぢやあるまいし……。それより、早くおつくりをしませうよ。露が消えちまうわよ。

（めいめい、懐中鏡を取り出して化粧をしはじめる）

桔梗　もう、あたしの着物もはげて来たわ。

女郎花　あたしを御覧なさい、こんなに顔が荒れちまつて……。（こうろぎがぴよんぴよん跳ねながら

現れる）

こうろぎ　よう、みなさん、おめかしだね。

女郎花　あら、こうろぎさん、早いのね……。昨夜はどうだつた？

こうろぎ　昨夜は、蟷螂の奴に出くわして、命からがら縁の下へ逃げ込んだよ。

女郎花　さうぢやないのよ、あの話よ、北の窓口の一件よ。

こうろぎ　ああ、あれね。あれはあれきりよ。だが、やつぱり話声は聞えたさ。かういつてたぜ――そこから中へはひつちやいやよ。そこにさうしてるのよ。

あんたはどこへでも登れるのねえつて……。奴さん窓からはひらうとしたんだね。

女郎花　まあ、図々しい。

桔梗　ちよいと、お嬢さんが起きて来たわ。

芒　窓を開けたわ。

こうろぎ　あの髪の毛はどうだ。やあ、欠伸をしたぞ。

女郎花　まだ睡むさうだわ。

芒　あの眼のこすり方……可愛いわね。

桔梗　顔色が悪かない、今朝は……。

女郎花　ここへ来た時よりずつと痩せたわ。

芒　何してるの、両手を差出して……。
女郎花　（けたたましく）あ、どうしたの。
桔梗　倒れたんぢやない。
女郎花　（おろおろ声にて）さうよ、さうよ、きつとさうよ。

第二場

舞台は前に同じ。
真夜中――星が輝いてゐる。

桔梗と芒と女郎花は、それぞれ草の根を枕に、すやすや眠つてゐる。

慌ただしく風が飛んで来る。芒が先づ驚いて眼を覚す。

芒　いやね、折角寝ついたところを……。

風　さう、まあ、怒るなよ。

芒　もつと静かに通つたら……。

風　せいぜい静かにしてるんだよ。

芒　どつちから来たの。
風　北から……。
芒　おお寒む。（襟をかき合はす）
風　今、すぐ行くよ。（といつて行きかけるが桔梗の足にけつまづく）
桔梗　いたいツ。だあれ、そこにゐるのは……。
風　やかましいなあ。
女郎花　（これも眼をさまし）また風、今夜は、とても眠れやしないわ。
風　そんなことといはずに眠つてくれよ。（大急ぎで走り去る）

芒　（耳を澄まし）しいッ……聞えない、あの話声……。

（みんな耳をすます）

少女の声　（微に）どうして、そんなに毎晩来るの……。何か、あたしに用があるの……。さ、帰って頂戴……。いやね、そんなに黙ってちや……。あたしは、それや、あんたが好きだっていったけれど、あたしの部屋なんかへ来ちや困るわ。帰らなけれや、婆やを呼んでよ。さうら、婆やを呼んぢやいやでせ

う。さ、お帰んなさい。早くさ……。

（長い沈黙）

芒　やっぱり、ほんとね。

桔梗　だけど、追ひ返されてるぢやないの。

女郎花　いい気味だ。

（間）

芒　（また耳をそばだて）なに、あの音は……。

桔梗　（眼を据ゑ）なに、あの草の中で光るものは……。

女郎花　（悸えて）蛇よ！

（みんな、身をすくめて、眠つたふりをする。そこへ、ふらふらと、蛇が現れる）

蛇　（溜息を吐く）おれはやつぱり駄目かなあ。あの肩の上を一度逼へばいいんだ。それが、どうしても、おれには出来ない。もう一度、あすの晩、行つて見よう。もつと、静かに窓をあけなくちや……。

（姿を消す）

女郎花　（半身を起し、蛇の去つた方を振り返りながら）なんて気味の悪い奴だらう。独言なんかいつて……。

桔梗　もう行つちまつた……？

女郎花　何か変なことといつてたわね。

桔梗　さうね。

女郎花　こうろぎさん、出鱈目ばつかし……。

芒　どうだつていいぢやないの、そんなこと……。

あたし、眠るわよ。

女郎花　さうすると、お嬢さんは、あしたの晩……。

芒　ねえ、ちよいと、もう黙つて頂戴よ。あしたになつたらわかるぢやないの。

（長い沈黙）

少女の声　まあ、あんたは、どうしてさう暴れるの。駄目よ。そんなに騒いだつて……。何処へ行かうつていふの……。あら羽根が折れるわよ……。お待ちなさい。そんなに火のそばへ行きたいの……。どら、

そこは硝子だから、はひれないのよ。馬鹿ね、あんたは……。

（長い沈黙）

さうれ御覧なさい。痛かつたでせう。さ、もうあかりを消してよ、あたし、寝るんだから……。

（長い沈黙）

女郎花　お嬢さんが寝るなら、あたしも寝よう（横

になる）

桔梗　御覧なさい、芒さんは、もうぐうぐうよ。

桔梗　どうでせう……あんた、足が冷たくはない……？　あたしの足、こら……一寸、さわつて御覧なさい。まるで石みたい……。

女郎花　あんたの足は、いつでも冷たいのよ。今夜だけぢやないわ。

桔梗　さうか知ら……。（頭を払ひながら）いつの間にか、蜘蛛がまた巣をかけたわ、あたしの頭の上へ……。

女郎花　（これも頭に手をやつて）あら、あたしの

頭へも……。

第三場

舞台は前に同じ。

翌朝――

芒　あの婆やさん、さつきから、うろうろ歩きまわつて、一体、何を探してゐるの。

桔梗　昔の恋人の名でも落したんぢやない。

芒　え？

桔梗　いいえ、なんでもないの。

芒　またきたわ。

（老婆現る。不安な様子）

女郎花　婆やさん、なにを探してらっしやるんですの。

老婆　（その声が聞えぬらしく、あたりをきよろきよろ見廻しながら）お嬢さま……お嬢さま……。

桔梗　お嬢さんが見えないんですか。

老婆　（それに頓着なく、一層声を張り上げて）お嬢さま、何処にいらつしやるんです、か……。（一段声を落して）ほんとに、この婆やを心配させないでくださいまし……。ちよつと眼をはなしてるひまに、どこへいらしつたんだらう……。

女郎花　婆やさん、婆やさん……。

老婆　（答へない）

女郎花　お嬢さんは、なぜお一人きり、こゝに残つていらつしやるんですか。何かわけがあるんですか。

老婆　（暫く考へた後）あのお召物でよそへいらつしやるわけはなし……。いやいや、あの調子ぢや、

どうかわからない…。さあ、困つた……。（といつて、歩きかけた時、ピアノの音が聞える。びつくりして立ち止る。が、やがて）おや、やつぱり、いらしつたんだ……。（急ぎ退場）

女郎花　あの婆やさんは聾か知ら……。

（この時、少女が楽譜を手に持つたまま現れる）

少女　まあ、綺麗に花が咲いて……あなたは女郎花さんね。今日は……。そつちが桔梗さんね。大きな

桔梗さんね。それから芒さんもゐるのね。何時から
そんなところに咲いてたの。あたし、ちつとも知ら
なかつたわ。みんなが、あたしのことを病気だつて、
外へ出さないいんですもの……。

（老婆が、後ろから恐る恐るついて来る）

少女　さ、みんなで、一緒に遊びませうね。何をし
て遊びませう、歌を唄ひませうか。え、歌、知らな
いの。まあ、かういふ歌も……。（小声で歌を唱ふ）
そいぢや、お話をしませう。桔梗さんあなた、お話、

上手らしいわ。さ、して頂戴……。（彼女は、耳を澄まして、桔梗の話を聞いてゐるかのやうである。眼を見張つたり、笑ひたさうに手で口を塞いだり、しんみりうなだれたり、快活に手を叩く真似をしたりする）

老婆　（静かに少女に近づき哀願するやうに）お嬢さまどう遊ばしました。お嬢さま、なにをそんなに……。（泣かんばかりに）お嬢さま、婆やの声がお耳にはひりませんか。

少女　（全く夢中で）さ、今度は女郎花さんの番よ……。今度は、もつと悲しいお話をして頂戴。悲し

い、悲しいお話よ……。（静かに、眼をつぶるやうにして、耳を傾ける）ああ、それがいいわ……。（しきりにうなづく。やがて眼に涙が溜る。一滴、二滴、涙が頰を伝ふ。肩がだんだん大きく波をうつ、しまひに、両手で顔を覆ふ）

老婆　（驚いて少女の肩に手をかけ）お嬢さま、お嬢さま、それがあなたの病気なんで御座いますよ……。さ、婆やとお話をして下さいまし……。婆やが面白いお話を致しませう……。

少女　今度は、芒さん、もつと、もつと悲しいお話をして頂戴……。ええ、どんなに悲しくつてもいい

わ。

老婆　いけません、お嬢さま……。あなたは、御自分で病気をお癒しにならなければいけません……。一度だけ、婆やとお話をして下さいませ。さ、婆やが、悲しい悲しいお話しを致しませう。

少女　芒さん、なにをそんなに考へてるの。さ、もう、あたし聞いてるわよ。

老婆　昔々、ある処に、珠子さまといふお美しいお嬢さまが御座いました。お父さまも、お母さまも、それはそれは、珠子さまをお可愛がりになりました。珠子さまは、お美しいばかりでなく、それは悧巧な、

優しいお嬢さまで、先々は、どんなに立派な旦那さまをお持ちになるかと、世間でも、みんな、お噂を致してをりました。その珠子さまが、どうしたわけか、この夏から……。

少女　（急に大声で笑ふ）いやね、ちつとも悲しくなんかないわ、そんなお話……。

老婆　いいえ、こんな悲しいお話は御座いません。この夏から、急に……急に……草花や鳥けだものなどとばかりお話をなすつて……。

少女　芒さんつて随分滑稽な方ね。

老婆　お父さまやお母さまの御心配は、どんなだと

お思ひになります……。

少女　それからどうしたのよ、風は行つちまつたの……。

老婆　（泣きながら）お嬢さま、お願ひで御座います。どうか一と言お返事をなすつて下さいまし。

少女　（笑ひながら）あら、いやだ。

老婆　（驚いて）へ？

少女　そんなこと訊くならいや……。（ぷんと起ち止り）芒さんはそんなことといふから、あたし、きらひよ。ねえ、桔梗さん。あなた、あたしの部屋へいらつしやらない。え、ぢや、女郎花さんと一緒でも

いいわ。（少女、桔梗と女郎花とを連れて退場）

老婆　（このあとを追ひながら）あああ、ながいきはしたくない。

芒　（しばらく考へた後）あの婆さんは、なにをいつてたんだらう……。しかし、あの娘が病気だつていふのは、どうしたんだらう。なにかわけがありさうだね……。

蛇　（突然草叢の蔭から逼ひ出し）おい、黙つてろい！

――幕――

底本：「岸田國士全集２」岩波書店
　　　１９９０（平成２）年２月８日発行
底本の親本：「新選岸田國士集」改造社
　　　１９３０（昭和５）年２月８日発行
初出：「大阪朝日新聞」
　　　１９２７（昭和２）年１月３日
※複数行にかかる中括弧には、けい線素片をあてました。
入力：tatsuki
校正：Juki
２００９年7月20日作成